

◆水明インターネット句会◆																				令和七年十一月
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
小春日や頷くだけの父のゐて	落葉追ふ風の行方を知らずして	大江戸線六本木駅冬の蝶	警官も板前もゐて夜学の灯	実柘榴は裂けて哀しや闇を噛む	帰り来る娘の笑みや白芙蓉	手締めする声をちこちに酉の市	潮溜まり細波立ちて初時雨	秋晴れや思ひの丈舞へ女宰相	ブルースの魂が棲む冬の滝	舌の根を蕩かし熟柿甘きこと	菜漬く夜の妻の話の埒も無し	人生の恥部を隠せる落葉かな	ワルキューレ鴉が群れる枯れ櫓	大好きな父さんの肩流れ星	点滴に繋がれ拝む初日かな	目覚めれば厨に音なく初時雨	澄みわたり余白の増へし冬はじめ	木通の実熟れ切腹をしてをりし	バス停や立冬の風髪ゆらす	

																					◆水明インターネット句会◆	令和七年十一月
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21			
冬の日のなかへ釣り糸垂れてをり	落とす葉を落として木立静かなり	梵鐘のとよもす沖やいさざ舟	晩鐘の長き余韻や枇杷の花	裏庭の闇深々と虫時雨	秋の夜思ひを風に声遠し	愛とぎれ終電までの冬屋台	鼻赤く那須七湯はみぞれかな	ふつと息吐き冬天の街をゆく	女子鷹匠のマリツジリング運ぶ鷹	憂国忌なぜに若者楯突かぬ	コーヒーの二杯目秋の夜長かな	子の世話になるはまだ先大根干す	古日記紅葉挟んだページあり	落日や案山子は長き尾を引きて	光芒の洩れて時雨の止みにけり	石段の一段飛ばし七五三	小春日和や婆婆が車掌の縄電車	歩き食ふ肉まん熱し山眠る	柿簾日の斑の中に猫の影			

◆水明インターネット句会◆																				令和七年十月
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	
築地松てふ風垣の有る旧家	湯の花の湯口に白し山眠る	影踏んで止めてみました木の葉髪	蓑虫や南京錠の掛かる蔵	音も色も消し去る山の雪景色	名月やひとりぼっちを暴くよに	終電の過ぎし踏切冬はじめ	障子貼り任せうろうろ杞憂せり	寝るための炬燵の城はピンク色	蓑虫や今朝も声かけ元気かと	秋燕朝夕二便の時刻表	埋蔵金の赤城山麓からつ風	話の穂とどまり流る衣被	冬晴れや蒼天に映えし六甲山	風に舞ふ龍飛の判官雲隠れ	神送とか神迎とかワンチャン	紅葉狩茶店のひとに会ひたくて	幼子のもろ手かじかみ冬兆す	善男善女の列へぐつぐつ味噌おでん	老け顔の驚き耳に秋暮るる	

◆水明インターネット句会◆ 令和七年十一月	
61	銀輪の風にもカサと散り紅葉
62	移築した古民家の梁すす払い
63	ほろ酔ひのコートをひらり奴消へり
64	緋めだかの底に動かず水の秋
65	林泉の松に菰巻く冬構
66	秋桜や薄紅の風わたりをり
67	夜風鳴り雨戸をたたく木の実かな
68	冬林檎啜へて孤独象の鼻
69	綿飴の小春日和に透きとほる
70	荏苒 <small>じんぜん</small> や句歴を聞かれ鴟 <small>もた</small> の黙
71	洗い場の土の匂ひや新牛蒡
72	侘しらに門脇つはの花明り
73	山眠る汽笛一声フェリー発つ
74	メモ欄は句会二つや古暦
75	クルトンの潤けるスーパ冬うらら
76	年の瀬や何時ものカフェに「イン・マイ・ライフ」
77	思ひ出のあの日この日や帰り花
78	鰯曇西へ西へと一万歩
79	凧の研ぎ澄ましたる月の影
80	木通の実熟れ切腹をしております

◆水明インターネット句会◆																				令和七年十一月
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	
人攫ひ出さうな気配虎落笛	水縹の空と海抱き秋澄める	川刻む谷埋め尽くす紅葉かな	寒稽古息の凝りたる五稜郭	貰ひ柚子食べ買ひ柚子を浮かべけり	立冬や一病増えしやりきれなさ	天高し引き綱たぐり山車を出す	熊鍋の途中子熊にミルク遣る	ハロウィーン転んでベソかく吸血鬼	ベランダに横日ゆらめく冬の朝	こだわりの柚子湯に使う柚子の数	木の葉舞ふ公園チェロのプレリユード	湯豆腐や子が出て行った夜の雨	黄落や旅行客にも市民にも	秋深し つのる思いは 届かぬか	凧やもらひし子猫ふところに	萩の木の強き剪定村小春	どつと来る風のいたづら落葉搔	頷いて聞いてやるだけ林檎剥く	冬めくや作務衣忙しき庫裡の朝	

[illegible]